

博士学位・請求論文要旨

『ベヴァリッジの経済思想—ケインズたちとの交流』

申請者 小峯 敦

I はじめに

本論文の研究対象は、福祉国家の父 William H. Beveridge (1879–1963 年) の経済思想である。ベヴァリッジは失業問題の専門家として世に出て、ケインズ、ピグー、ロビンズ、ハロッドなど当代一流の経済学者と深く交流しつつ、理想の経済学を新興大学であった LSE (London School of Economics and Political Science) で実現しようと腐心した。また中世における小麦価格や賃金の膨大なデータを収集し、景気循環における法則の解明を終生の研究対象とした。同時代人はその業績を高く評価し、彼を王立経済学会および王立統計学会の会長に推挙した。これらはすべて『ベヴァリッジ報告』(1942) の出版以前の出来事である。

つまり、ベヴァリッジは福祉国家のグランドデザインを描く前に——または描く際に——、何らかの「経済学的思考」を形成し、経済思想家としても同時代人に多大な影響を及ぼした人物であった。しかしながら、従来の研究は社会保障論や福祉国家論に拘泥するあまりに、あるいはハイエクやロビンズの侮蔑的な評価を無批判に受け入れるあまりに、ベヴァリッジの経済思想を無視・軽視する傾向にあった。

なお申請論文は次の通りに公刊されている。小峯敦『ベヴァリッジの経済思想——ケインズたちとの交流』昭和堂、2007年2月(初刷)、2008年5月(2刷、字句修正)。

II 本論文の目的・方法・構成

本論文の目的は、上述のような研究状況に対し、ベヴァリッジが経済学の歴史の中で——特に1910年代から50年代まで——重要な位置を占め、現代でもその経済思想を再考する意義があると論じる。この目的を達成するため、より具体的な目標を次の三点の解明に求めた。第1に、失業の理論、経済データの集積、経済学の制度化、経済学の政策利用、経済学者の交流といった各側面で、ベヴァリッジの経済思想がどれほど影響力を持ったのか(思想の影響、主の目標)。第2に、社会思想や政治思想から異なる形で、彼の経済思想を一貫性や独

自性を持った構造（形式と内容）として再構成できるか（思想の構造、従の目標）。第3に、現在の福祉国家・福祉社会に向けて、彼の理念が何らかの示唆を与えうるか（思想の現代性、補完の目標）。

本論文は経済学史・経済思想の研究成果である。その通常の研究方法に則り、——未公開資料も活用しつつ——原典の引証による論述が中心となる。その上で、ベヴァリッジの公的活動を、①社会背景や支配的な思想・理論の観点、②経済学者たちとの文通を含む交流の観点、から再構成する。現地で収集した資料には、イギリス公文書館（前 PRO）の政府文書、LSE のベヴァリッジ文庫・パスフィールド文庫・ロビンズ文庫、大英図書館（および新聞館）の資料、ケンブリッジ大学のケインズ文庫、オックスフォード大学のヘンダーソン文庫などがある。

本論文の構成は次のとおりである。序章で課題・方法・構成を示した後、第1章でその生涯を略述し、まず全体像を与えた。初期（青年期から第一次世界対戦終結まで）、中期（LSE 学長の 1920-30 年代）、後期（「ベヴァリッジ報告」から死去まで）という時系列に応じて、本論を第一部・第二部・第三部に分けた。さらに終章を加え、全体の総括と結論を示した。

III 各章の要旨と主要な論点

本論となる 15 章分の内容は、各部ごとに次の通りである。

III-1 第一部（初期の思想）

第1章はベヴァリッジの全体的な評価の前提作業として、その略伝を示す。彼は天職（経済参謀）を求めて転職を繰り返し、まさに労働の流動性確保を自ら体現する人生を送った。また官界・学界・政界を渡り歩いた人生経験は、包括的な制度の設計および実施を可能とする基礎を築いた。俸給と仕事に拘るベヴァリッジの生真面目な人生は、投資と芸術を重視するケインズと対照的であった。なお公文書館などの新資料も用い、代表的伝記である Harris（1997）の内容を補った。

第2章から第5章までは、主著『失業—産業の問題』（1909）を巡る問題を扱う。第2章は同著が書かれた社会的背景を、改革の時代精神、社会改良家との交流、正統派経済学者との対比、上司（ラウエリン-スミス）の影響、という側

面から多角的に論じた。1900年前後にイギリスでは、貧困・失業が社会問題として認知され、理想主義や科学的精神に基づいた国家の経済的介入が広く論じられていた。ベヴァリッジをベンサム、ジェヴォンズ、マーシャルなどの「正統派」と対比すると、効率的な改革への情熱は共有するものの、個人的資質の排除（道徳の軽視）という点で相違点が明らかになる。この段階では、経済学よりも社会改良家の実践的活動に大きく影響されたことが判明した。

第3章は『失業』の形成過程を扱う。本章は *European Journal of the History of Economic Thought* に掲載された論文の改訂版であり、主著の形成過程を独特な三段階で把握する。ベヴァリッジは1903年から丸六年かけて、失業問題に新しい認識と解決方法を与えようと苦心した。三段階による思考の発展は次の通りである。期間 A「雇用不適格者から失業者へ」では、失業者が常勤・臨時雇用者・雇用不適格者に分類され、失業問題は道徳的退廃ではなく産業構造から生じると論じられた。期間 B「失業者から失業へ」では、人物から現象に考察が移動した結果、職業紹介所という解決策を発見され、経済的思考が深まった。「労働の予備」(p.100) という要の概念——労働需要の突発的な変化に適応するための一定の失業量——も初めて使用された。期間 C「保険との結びつき」では、拋出型の保険が補完の解決策となった。全期間を通じて特筆すべきは、国民最低限保障の概念 (p.101)、完全雇用との連関、経済循環を促す原資としての生存賃金、という後のベヴァリッジ思想を先取りしている点である。

第4章は『失業』の内容を精査する。そこでは「労働の特殊性と景気循環に支配される分断された労働市場を、国家の力で組織化すべき」と論じられた。本章では三つの原因（景気変動、労働の予備、労働資質の陳腐化）と三つの対策（職業紹介所、失業保険、公共事業）を整理した上で、次の四点に経済学史上の意義を求めた。第1に、ベヴァリッジはその後の経済学者に失業問題を認知させ、発展を促す媒介となった。第2に、労働という特殊な財に市場分析（数量調整）を導入した。第3に、ベヴァリッジ特有の思考法——基本思想のもとに、主・従・補完の要素を配置する型——が初めて形成された。第4に、同時代の著名な経済思想家であるポランニーやランゲとの対比で、ベヴァリッジの歴史観を特徴づけた。

第5章はピグーの失業論と対比することで、ベヴァリッジの影響力と特徴を抽出する。1908年から1914年にかけて、ピグーはウェッブ夫人やベヴァリッジの議論を受けて、専門的経済学者の観点から『失業』（1913）を著した。そこには再分配*の必要性（国民最低限保障）と賃金の調整不良という二つの考えが矛盾した形で同居している。数量調整を重視するベヴァリッジ（そしてケインズ）は書評においてこの点に不満を持った。ここには生存権と経済調整との両立という福祉国家の大きなテーマがある。

III-2 第二部（中期の思想）

第6章は経済学の「制度化」を争点に、ベヴァリッジにおける経済学の理想と、LSEにおけるその実現過程を追う。ロビンズ、ケインズとの直接比較、ジェヴォンズ、マーシャルとの間接比較を行った。ベヴァリッジは理想の経済学を「教養に基づいた科学性」に求め、LSEや「経済学教師協会」で実現しようとした。この場合の科学性とは、その後の経済学が重視した「厳密さ」（形式的整合性）ではなく、「精密さ」（帰納データによる正確な予測）を意味し、またジェヴォンズやロビンズが要求した「理論と政策の二元論」ではなく、その一元化を仮定するものであった。ベヴァリッジは経済学に自然科学的基礎（社会生物学や生理学）も求めた。この試みは途中まで非常に成功したが、最後には挫折した。彼の尽力はマーシャルによる制度化、ケインズ以降の制度化の中間に位置する忘却された歴史である。

第7章はケインズとの人口論争を扱う。家族手当を媒介にして、人口論は両者の思想的変遷が1920年代から40年代にまで窺える重要な論点である。激しい論争の奥で、優れた階層の減少という優生学的な懸念が両者には共有されていた。ただし1920年代後半から両者とも遺伝よりは社会的要因を重視し、有効需要や社会保障という手段で貧困問題の解決を図ろうと徐々に転換した。両者はともに優生学が持つ選別主義や不自由さを超え、普遍主義や自由社会を指向した。両者がなぜ福祉国家の理念を協働して構築できたかという理由の一端は、こうした人口論の新しい解釈によって説明できる。

第8章は1920年代と30年代の広範な著作活動を考察する。経済史・人口論・

* 公刊物では印刷段階での誤記（再配分）が残ったままとなっている。

失業保険・関税・失業論という多様な対象の中に、複眼的思考の深化を見いだした。その特徴は次のようにまとめられる。第1に、膨大な生データを発掘して一般法則を発見するという作業は、ベヴァリッジの理想とする経済学そのものである。第2に、失業保険に関して、権利としての普遍的な給付を指向しながら、なお財政的な裏付け（拠出原則）を重視している。第3に、イギリス経済の苦境を産業上の硬直性（特に賃金）によると認識したため、この時期は長期均衡＝規範と考える正統派経済学に依拠した。ただし摩擦的失業を解消する有効需要の効果など、ケインズ派に親和的な部分も存在する。第4に、最先端の景気循環論をベヴァリッジは消化し、失業論をさらに進化させた。1909年の診断を労働市場の未組織化とくくり、賃金の硬直性、特殊な大恐慌、失業保険の負の影響という三点を加え、包括的な分析となった。

第9章はハロッドとの交流を論じる。その交流は経済的知の政策利用、経済学の科学化という二点で重要な意味を持つ。ハロッドはベヴァリッジを「最善の人物」と呼ぶほど、その社会科学方法論を高く評価した。社会現象を自然現象に近似すること（斉一性の仮定）で、観察・帰納・演繹・検証という科学の要件を満たすべきだからである。またその経済学に基づいた知を、自らが政策決定の場に関与することで応用し実現する強い意志を持っていたからである。ピグー『失業の理論』（1933）の書評をめぐる書簡を含め、この側面は従来完全に無視されていた。

第10章は経済参謀論という最重要の思想を論じる。経済参謀とは経済学を熟知する公務員が政府に常駐し、長期的・包括的な視野から内閣に助言する少数精鋭の集団である。この概念——経済的知を政策利用に転換させる装置——を用いることで、ベヴァリッジ経済思想の進化および影響を整理しうる。初期の失業論と同様に、四つの類似した過程が窺えた。①彼自身が新しい概念の強力な提唱者となり、②専門的経済学者がそれを引き取って流布し、③しかし両者に齟齬が生じて、④最後にベヴァリッジがその概念を自ら実現しようと腐心する。ただし労働市場のみの初期と異なり、中期では経済のあらゆる領域に考察が拡大した。

III-3 第三部（後期の思想）

第11章は『ベヴァリッジ報告』(1942)と『自由社会における完全雇用』(1944)をケインズとの関係も意識し、統一的に解釈する。1938年から43年までの書簡を分析することで、両者に共通する心性(思考)が明らかになった。管理経済における社会保障・完全雇用の必要性である。また国民最低限保障に基づき、収支均衡を絶対条件としながら、窮乏からの解放を図る試みであった。完全雇用はその前提であるだけでなく、社会保障を強化する。ベヴァリッジによるケインズ経済学の受容はこの思考を背景にしつつ、自らの失業論の拡大・完成(有効需要論、産業配置の統制、労働移動の組織化)でもあった。

第12章は第10章を補完して、経済参謀論の最終形を探る。イギリスはマクミラン委員会(1930)やスタンプ調査(1939)を経て、内閣経済部の発足という形で経済学者が政策形成に直接関わるようになった。ベヴァリッジとケインズはこの過程を強力に推進し、自らも政策関与していた。経済参謀は政治—経済—社会という三層をつなぐ結節点であり、「自由社会における管理経済」を可能にさせる装置であった。両者が1940年代に協働して「福祉国家の合意」を作り上げたのは、共通の心性や長年の交流を鑑みると必然性がある。

第13章はヘンダーソンを媒介にして、ケインズとベヴァリッジの自由主義の内実を明らかにする。ケインズの共同研究者であったヘンダーソンは、やがて反ケインズの立場となり、大蔵省顧問としてベヴァリッジ報告を弾劾した。均衡財政・金本位制・自由貿易という正統説を堅持するヘンダーソンは、経済現象の一元的なマクロ的処理に反対したが、裁量主義そのものには賛成した。産業ごと場面ごとの配慮(ヘンダーソン)、経済全体の管理(ケインズ)、社会全体の統一的な計画(ベヴァリッジ)という具合に分かれるが、三者とも個人の自由と多様性を信奉し、政府の裁量政策によって理想を実現させる点で、ニューベラリズムの進化・完成に貢献したと見なせる。

第14章はロビンズとベヴァリッジの「協働関係」を描く。従来は断絶のみ記録されていた両者だが、連邦主義という理念形成では、「世界平和という究極の安全策」を実現しようとして共に奮闘した。両者は個人の自由・多様性を守りつつ、国際関係の秩序を大規模な「計画」によって達成すべきと主張した。その理念型が国家主権の多くを国際的機関に委譲する連邦制である。「秩序なくして経済

なし、平和なくして福祉なし」とロビンズが言うとき、市場の円滑な運行や欠点の排除に向けて、連邦政府という一元化された仕組みが希求されている。この理念は古典的自由主義を修正したニューリベラリズムに属する。

第 15 章は『ベヴァリッジ報告』『自由社会における完全雇用』『自発的活動』（1948）という三つの報告書を総合的に解釈する。前二作は社会保障・完全雇用を扱った。しかし国家の力（統制）、市場の力（営利）でも解決できない膨大な領域がある。集産主義と個人主義の狭間にあつて緩衝地となる共同体である。ここでは社会的良心に従った市民が隣人を自発的に助ける仕組みが必要となる。ベヴァリッジは前二作で市民の安全網 **safety net** を構築しただけでなく、第三作では市民が能動的な生活を行うための跳躍台 **spring board** も考案した。国家・市場・市民が相互に依存して発展していく社会こそ、福祉社会の本質である。

IV 本論文における結論

本論文では 1900 年代から 50 年代まで、すべての期間におけるベヴァリッジの経済思想を精査した結果、次の三点に集約される新しい知見を得ることができた。これらの結論は、設定された目標に対応する。

IV-1 経済学の歴史における位置づけ（影響）

ベヴァリッジの経済思想は同時代の経済学者に大きな影響を与えた（終章第 2 節）。次のような多方面の実例が明らかとなった。①現代的な失業論の先駆として、経済学者（特にピグーやケインズ）がこの分野に参入する契機を提供した。②中世から近代にかけて、膨大な物価史・賃金史を集積し、経済史および統計学に貢献した。③ジェヴォンズやマーシャルとまったく異なった形で、別系統の「経済学の制度化」を LSE で進めた。④経済学の知識を政策の現場に伝導する概念「経済参謀論」を考案し、流布させた。⑤ピグー、ケインズ、ロビンズ、ハロッド等と交流し、彼ら自身の経済思想にも影響を与えた。特にケインズとの交流は、「福祉国家の思想史・形成史」において重要である。

IV-2 新しい経済思想の特徴（構造）

初期・中期・後期という変化するベヴァリッジの特徴を抽出することはできる（終章第 1 節）。しかし、それらを超えて、社会思想や政治思想からは区別さ

れた一貫した経済思想が存在する。①まず形式として、その思考様式には一定の型とその発展がある（終章 3-1）。ある問題に対処する根本的な思想がまず設定され、原因や解決策の中で究極的な要素を主としつつ、第二の要素を従として、最後に残余を補完とするパッケージを完成させる（一時点の包括性）。次に時代に叶う新しい要素を導入し、既存の要素と配置を組み直すことで、より根本的な解決策を常に指向した（進化の包括性）。こうした「柔軟な包括性」こそ、ベヴァリッジの思考形式における最大の特徴であった。②次に内容として、その経済思想は「官僚的経済知」という 20 世紀型の先駆となった（終章 3-2）。19 世紀までは、様々な主体（統治者・商人・資本家・労働者・企業家・銀行家）の利己心や利他心が記述され擁護（批判）されてきた。ベヴァリッジがコアとして持ち具現化した経済思想はこれらから異なり、「官吏」「管理」である。清貧・服従・無名が求められた 19 世紀までの官吏と異なり、20 世紀初頭から経済状態の観察・調整・管理を生業とする社会的存在が重要な位置を占めるようになった。ベヴァリッジは官吏としての経験を踏まえ、生涯、自由と計画の平衡に腐心し、この新しい主体として振る舞った。経済的知を熟知した上で政治過程に関わり、広い社会的視野から経済問題を相対化することで優先順位を付けた包括的計画を内閣に提出する。これが彼の天職であった。

IV-3 「良き社会」への示唆（現代性）

ベヴァリッジの経済思想を歴史的に再構成することで、福祉国家・福祉社会——中間団体の自発的活動にも支えられ、多元・多様な生き方が可能になる社会——の復権にとっても若干の示唆を与えられる（終章 3-4）。彼は最終的に次の三つを包含する理念を確立した。いずれも歴史の教訓として、現代への課題となる。第 1 に、最低限の経済状態が再生産される条件の確定である。つまり現代産業に必然的な失業という浪費を廃止することで、所得の恒常的な下支えを可能にする。第 2 に、社会保障の完備である。世界平和を究極の安全目標としつつ、所得・住宅・教育・余暇の最低限保障を行う。第 3 に、市民の権利と義務の確定である。権利とは市民として普遍に持つ国民最低限保障であり、義務とは市民が社会的存在であるための努力目標（保険料の拠出と自発的活動）である。

V おわりに

ベヴァリッジは福祉国家の設計者であるが、同時に福祉社会という理念の提唱者でもある。彼は最終的に、社会保障・完全雇用・市民社会の相互連関性を強く意識し、世界平和の中でこれらを求め続けた。自由な福祉社会とは、国家（政治）・市場（経済）・共同体（社会）が相互に関連し安定し、その中心に存在する市民に、最低限のナショナルミニマムが実現していると同時に、より高次な生活への可能性が埋め込まれた状態である。本論文によるベヴァリッジの経済思想の再構成により、以上の解釈が可能になった。

ベヴァリッジの人生はまさに包括的であった。社会事業家、ジャーナリスト、官僚、学長、政治家、平和運動家、そのすべてを体験した。一点に留まらず、絶えず次の包括性を目指した。事実観察・理論構成・政策提言・大衆説得・制度構築というすべての面で、卓越した能力を発揮した。これに比類する同時代の思想家はケインズしかいない。両者が失業と福祉の問題に一定の解答を与えたのは必然的であった。

(7984 字)